

アメリカの大学図書館における情報リテラシー教育活動 ～ハーバード大学等の事例から～

江上 敏哲*

筆者は2007年3月から1年間、研修としてハーバード大学イェンチン図書館に滞在した。研修期間中に見聞したハーバード大学、マサチューセッツ州立大学アマースト校、その他のアメリカの大学図書館におけるオリエンテーションや講義をもとに、情報リテラシー教育活動の事例について報告する。また、日米間に違いがあるかどうかについて考察する。日米とも同様の課題を抱えていること。その一方で、web技術やデジタルメディアの活用、コミュニケーションの形成の仕方に違いがあること、等。

キーワード：情報リテラシー教育活動、ハーバード大学、マサチューセッツ州立大学アマースト校

1. はじめに

筆者は2007年3月から1年間、当時在籍していた京都大学附属図書館からの派遣で、ハーバード大学イェンチン図書館 (Harvard-Yenching Library) に実地研修として滞在し、現地の様々な図書館活動・運営の実例を見聞・調査した。長期に渡って滞在することで、図書館活動の現場とその背景にあるものを間近で学び、その効果や問題点について考えるという、貴重な体験をすることができた¹⁾。

本稿では、ハーバード大学をはじめとするアメリカの大学図書館における情報リテラシー教育活動について、自ら参加・見学することのできた実践例を中心に報告する。また、日米間にどのような違いがあるのかについて、若干の考察を試みたい。ただし、報告する事例はどれも2007年半ばから2008年初頭にかけてのものであることを、あらかじめお断りしておく。

なお、情報リテラシー教育活動をはじめとする本研修での見聞・調査については、京都大学図書館機構 web サイト上で「ハーバード日記」²⁾と題して随時報告してきた。本稿と併せてお読みいただければ幸いである。

2. ハーバード大学

2.1 概要

本論に先立ち、ハーバード大学とその図書館について概説しておきたい。

ハーバード大学は、アメリカ東海岸の都市・ボストンに隣接したケンブリッジ市にある。1636年に開学し、アメリカ最古の大学とされている。学生数約20,000人のうち、学部生約7,000人に対して、院生はその2倍近い約13,000人³⁾。教員・アカデミックスタッフは約3,600人である。

学内には大小あわせて80以上の図書館・図書室があり、全学で約1,600万冊の書籍を持つ。図書館に関わる職員は

約1,200FTE。年間資料購入額は約3,000万ドルに及ぶ。これら全館が部局・分野の枠を超えて Harvard University Library (HUL) と呼ばれる図書館群を構成している。Directorのもと、各館・室の他、HUL全体の図書館業務をカバーする各種事務局・施設・プロジェクトが組織されている。Weissman Preservation Center (古典籍・特殊資料専門の保存・修復部署)、Harvard Depository (郊外保存書庫とその管理組織) 等。

さらにこのHULの中に、Harvard College Library (HCL) と呼ばれるグループがある。これはHUL内の13の図書館・図書室からなるグループである。ハーバードの旗艦図書館である Widener Library、学部生用学習図書館である Lamont Library、筆者の研修先である Harvard-Yenching Library 等が属するが、Law School Library や Business School の Baker Library 等は属さない。Librarian (HCLを統括するトップのライブラリアン)のもと、図書館業務の各面で連携をとっている。Imaging Service (資料の撮影・デジタル化)、Collections Conservation Lab (一般図書の保存・修復) 等、全体をカバーする部署がある。

ハーバードの旗艦図書館である Widener Library は、1915年開館。人文・社会系を中心に、約640万冊の書籍を抱える。言語・地域ごとの蔵書構築専門ライブラリアン、レファレンス・研究支援を行なう部署等がある。HCL全体の図書館業務をカバーする各部署もこの館内に居を構える。

学部生向けの学習図書館である Lamont Library は、1949年開館。蔵書数は約18万冊。学部生のカリキュラムをサポートする図書館として活動している。

筆者が滞在した Harvard-Yenching Library は、Harvard-Yenching Institute 内の図書館として1928年に設立された、東アジア研究図書館である。蔵書数は約120万冊。選書・レファレンス担当の各言語サブジェクトライブラリアンの他、カタログ、e-resource 専門ライブラリアン等がいる。

* えがみ としのり 国際日本文化研究センター資料課

〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町 3-2

Tel. 075-335-2066

(原稿受領 2009.4.28)

2.2 Lamont Library の Freshman Open House

Lamont Library は、先に紹介したように学部生用の学習図書館であり、学生の日々の学習活動を支えることを第一義として運営されている。図書・雑誌・ビデオ等の資料が入門者向けを中心にそろえられ、授業用の資料はコースリザーブとして提供されている。また、学生の居場所、快適な学習空間としての環境整備にも力を入れている。2005 年秋、学生団体からの要望を受け入れ、24 時間開館が実現した。さらに 2006 年には、眺めのよい窓際を改装した館内カフェがオープンしている。飲食自由、グループでのディスカッションも自由なエリアとして、夜間の遅い時間帯でも多くの学生たちでにぎわっている。デリの販売時間も、平日は午後 3 時から午前 2 時までと、学生の活動時間にあわせたものになっている。他に、ソファ、キャレル、無線 LAN、館内でのノート PC 貸出等。長時間滞在し、学習活動を館内でまかなえる設備・サービスが整えられている。ただし、ラーニングcommonsと呼べるサービス体制があるわけではない。また、このカフェのように自由に飲食・ディスカッションができ、無線 LAN 等も整備されているようなコンモンスペースは、Lamont Library だけではなく学内の随所に数多く設けられている、ということも付け加えておきたい。

新年度を迎えた 2007 年 9 月 13 日午後、この Lamont Library で行なわれた Freshman Open Houseに参加した。

4)



写真 1 Open House 当日

これは新入生向けの催しで、利用指導目的のオリエンテーションというよりは、歓迎イベントに近い印象を受ける。写真のように、館外・館内は風船や垂れ幕、色紙、ポスター類でにぎやかに飾りつけられている。また、館内で新入生を出迎えるスタッフたちは、皆おそろいの T シャツを身につけており、その胸にはこの年の Open House 用キャッチフレーズ「You@Lamont」のロゴがデザインされている。入り口ではミントやキーホルダー等の小物、館内カフェではスナックやドリンクが手渡され、抽選で Lamont Library 特製ロゴ入り USB メモリがあたるという

チケットも配られていた。

Welcome Class of 2011!

Come to Lamont Library's Freshman Open House

Thursday, September 13th
1-5pm

DEMOS! TOURS! PRIZES!

Find out why we're
a favorite undergraduate
destination!

Bring this ticket to enter our raffles

You@Lamont Map
adapted from
http://lclcd.com/256/



Raffle Ticket

Name: _____

Email: _____

Phone: _____

one entry per person

写真 2 抽選チケット



You@Lamont Freshman Open House Thursday, September 13 1-5pm

Menu of Events

— things not to miss —

Take a tour
Get a snack and a drink
Enter the raffle
Visit Morse Music & Media
Apply for a job
Sign up for our blog
Visit Research Services
MEET OUR STAFF



写真 3 フライヤー

このような演出の中、館内ツアーが行なわれる。ツアーは時間や定員等を設けず、学生が集まるごとに順にスタートする。HCL 各館への呼びかけで集められたライブライアンが学生を案内し、館内のところどころで設備・サービス、資料の探し方や情報リテラシー全般を解説する。このライブライアンたちも他館からのヘルプではあるが、ツアー担当用のトレーニングが別の日に行なわれている。

館内各所（貸出カウンター、視聴覚資料カウンター、リサーチサービスデスク等）には、ツアーガイドとは別にアドバイザーとしてスタッフが待ち構えている。Lamont Library で受けられるサービスや入手できる資料につい

て、学生たちの質問に答え、情報を提供する。

配布されるハンドアウトの資料も様々である。利用案内パンフレット、開館時間を記したフライヤー、OPAC 検索ガイド、本をクリティカルに読む方法、図書館のディープな使い方等。中でも丁寧に作られていたのが「YouGuide」と題されたセルフツアー用のパンフレットである。これは、各フロアの地図を見ながら自分自身で館内の要所を巡回できる、というもの。各種設備やコレクション、サービスカウンターについて、どこに何があるか、どんなサービスが受けられるかだけでなく、どのような過ごし方ができるか、どんなときにおすすめの場所であるか、窓からどんな風景が楽しめるかに至るまで。図書館の機能を教える文書というよりは、体験を伝えるメッセージとして、親しみやすく解説されている。巻末にはスタンプラリー形式のクイズが掲載されており、こちらも抽選で景品が贈られる。

あらゆる手法で Lamont Library の魅力を伝えようと試みられている Freshman Open House だが、この年に参加した新入生は約 300 人であった。これは新入生の 2 割ほどにあたる。

なお、この Lamont Library はニュースリスト⁵⁾を発信しており、新しいお知らせや図書館利用・情報検索のヒント、データベース・レファレンスツールに関する案内等の情報を、blog・RSS・e-mail 等の形で受け取ることができる。

2.3 GSAS Orientation

Graduate School of Arts and Sciences (GSAS) は、ハーバード大学院の中核をなすリベラルアーツの大学院である。人文・社会・理工系 50 以上の部局からなり、約 3,700 人の大学院生が在籍している。

2007 年 9 月 12 日午後、HCL によって行なわれた院生向けの GSAS Orientation に参加した。これは、図書館個別の催しではなく、新院生の生活・入学手続き全般についての合同オリエンテーションの一環として行なわれたものである。Dudley House と呼ばれる建物のホールに、住居・保険等に関する各部署がそれぞれデスクを設けており、院生はそれぞれ窓口に向かい、自分に必要な情報や書類を

入手する。部署によってはグッズやスナックの配布、iPod 他 の 景 品 が あ た る ル ー レ ッ ト ゲ ー ム や 抽 選 等 の 演 出 で に ぎ わ っ て い た。

そのハウスの 1 室を借りきる形で、HCL による新院生向けの図書館オリエンテーションが実施された。「Introduction to the Harvard College Library」と題されたこの催しは、午後の間に 2 回、各 30-40 分ずつ行なわれ、両回とも参加者 80 人ほどの規模であった。

主催は Widener Library の Research Service (レファレンス等研究調査を支援する部署) で、加えて HCL 各館のライブラリアン 30 人ほどが集まっている。オリエンテーションは Widener のライブラリアンによる概説(図書館システムやサービス)に始まり、次いで主な部局図書館からのライブラリアンによるプレゼンテーションへと続く。ある人は OPAC から GoogleBook 本文に至るまでの検索方法、ある人は自館で所蔵する古典籍コレクションのデジタル画像紹介、ある人は研究者としての学術情報に対する心構え、というように、多岐にわたる内容であった。

ひと通りのプレゼンテーションが終了した後、列席していたライブラリアンによる簡単な自己紹介が始まる。彼らは HCL の各図書館に所属し、様々な専門分野・役目を持つライブラリアンである。部屋全体を取り囲むようにして壁際に立って並んでいるライブラリアンたちが、一人ずつ、思い思いのアピールを行なう。自分の専門分野を述べる、どのオフィスにいるかという場所を説明する、今日はどんなハンドアウトを持参しているかを掲げて見せる、等。

この自己紹介をもってオリエンテーションそのものは終了となり、多くの学生たちは退室して行く。(参加者全員にお土産として USB メモリが配られる) が、一部の学生はそのまま室内に残り、先ほど自己紹介をしたライブラリアンたちのもとに歩み寄って、じかに話をし始めた。彼ら・彼女らは自分の研究分野に関係するライブラリアンを自ら見つけ、自分のプロフィールや研究テーマを説明したり、アドバイスを求めたりする。迎えるライブラリアンの方も、「それにはこういうデータベースがある」「そのことについてはこのハンドアウトに詳しく書いておいた」「それを探したければ一度うちの図書館へきてもらえればよい、私は何曜日の何時からレファレンスデスクにいる」というように、学生の求めに応じた案内をしたり、持参したハンドアウトや名刺を手渡したりしていた。

このようにして行なわれる院生とライブラリアンとのインフォーマルな交流もまた、このオリエンテーションの重要な目的の 1 つと言える。事前に HCL 各館ライブラリアンに宛てて送られた案内文では、図書館についての実用的な情報を伝えることだけでなく、院生自身の研究にとって有用なライブラリアンの名前を知ってもらうこともまた、目的として挙げられていた。当日同行した Harvard-Yenching Library のレファレンスライブラリアンも、e-resource のハンドアウトや学内にある東アジアコレクションのリスト等を持参しており、毎年参加しては何人かの学生とコミュニケーションをとっている、とのこと



写真 4 Orientation 当日

であった。

2.4 その他の実践例

ここでは、ハーバード大学における情報リテラシー教育活動について、その他の実践例を紹介したい。

Widener Library では利用者向けの館内ツアーが通年で行なわれている。毎週木曜日の午後 3 時から、と日時があらかじめ決められており、かつ新学期シーズンには連日実施される。特に申し込みがなくとも、定刻に人が集まっていればそのままツアーが始められる。筆者はこのツアーに複数回参加する機会を得たが、ツアーの内容がマニュアル化されておらず、担当するライブラリアンや集まった参加者によって異なる、という点が印象的であった。まず冒頭の自己紹介で、参加者のプロフィールや専門分野が確認される。それをふまえた上で、館の歴史や建築にまつわるエピソードがつぶさに語られることもあれば、OPAC を検索してからその現物を探し出すために書庫を歩き回る、という一連の流れが実践されることもあった。参加者からのその場での質問に、臨機応変に対応してツアーが進むという様子もまた、印象的であった。

Harvard Law School Library の新入生向けオリエンテーションでは、Lamont Library の Open House と同じく、館内が風船等で装飾され、スタッフが「Ask us」と書かれたおそろいの T シャツを身に着けていた。また、いくつかの本を探してその請求記号を回答すると、抽選で映画のチケットや iPod があたる、というクイズが企画されていた。これには、図書館を利用しサービスを受けることにまず慣れてもらう、というねらいがあるとのことであった。

Harvard-Yenching Library でも、新学期シーズンに複数のオリエンテーションやガイダンスが実施された。Scholars Orientation では、データベースや文献管理ソフトの使い方、学内コンピュータ環境について等、デジタルメディアに特化した内容が解説された。これについてはこの年が初の試みとのことである。また、東アジア分野の新規利用者に向けてのオリエンテーションでは、ライブラリアンたちの紹介だけでなく、参加者たちが互いに自己紹介をしあうための時間が充分に設けられていたのが、印象的であった。オリエンテーション後の館内ツアーでは、各言語分野専門のライブラリアンが「あなたの専門分野は?」「時代は?」といったインタビューを随時交え、参加者のリクエストに応じて蔵書やサービスを解説していく。さらに、自分のオフィスはここである、レファレンスデスクには何曜日の何時から出ている、等も案内されていた。

内容にもよるが、講師やライブラリアンが一方向的に説明して終わるといった形のものよりは、参加者と随時コミュニケーションをとりながら臨機応変に進行していくものが多い。

3. UMass Amherst の文献探索講義

University of Massachusetts Amherst (UMass Amherst) がある Amherst は、ボストンから西へ約 100 キロ、

Amherst College 等 5 つの大学が集まる大学街である。UMass Amherst はマサチューセッツ州の州立大学の 1 つで、学部生約 20,000 人、院生約 2,000 人、教員約 1,000 人を抱える。その広大なキャンパスのほぼ中心に、地上 28 階建ての W.E.B. Du Bois Library がある。



写真 5 UMass Amherst 図書館

UMass Amherst 図書館での近年最大の話題はラーニングコモンズであろう。「そこにいるだけで学習活動のほとんどをまっとうできる場所」の提供を目的として設けられた、図書館内の学習支援スペースである。施設としての充実ぶりだけでなく、情報リテラシー教育の一環としても注目されるべき成功例ではあるが、その様子は日本でもすでに多数紹介されている⁶⁾ので、ここでは割愛したい。

2007 年 11 月、この UMass Amherst を訪れ、東アジア分野専門のライブラリアンである Sharon Domier さんが講師を担当する「Research in Japanese Source Materials」を傍聴させていただいた。UMass Amherst には日本研究の教員が 6 人、日本語・日本研究を専攻する学生が約 100 人在籍しており、Du Bois Library 内の East Asian Collection には日本語資料約 20,000 冊が所蔵されている。

傍聴させていただいた講義は、ライブラリアンである Domier さんが教壇に立ち指導を行なうものである。なお、名義上は日本研究の准教授との合同講義となっている。対象は学部 4 回生および大学院生で、実際に参加しているのは 5 人から 10 人ほど。半年間、週 3 回、50 分の講義で、図書館内の PC クラブルームを使って行なわれる。

この講義の目的は、論文執筆を控えた学部4年生や、本格的な研究にとりかかる大学院生が、自力で図書・論文を検索し入手できるようになることである。より具体的には、適切な問題設定と解決のための探索戦略を持てるようになること。北米および日本の図書館・情報サービス、主要なレファレンスツールを使いこなせるようになること。必要な文献(日英とも)を探し出し入手できるようになること、等。毎回宿題として文献探索の演習問題が出題される。実際に見せていただいた問題は次のようなものであった。

「徳永直『太陽のない街』について書かれた論文を探しなさい。見つけれられたもののうち、もっとも古いものともっとも新しいものは何か。情報源とともに示しなさい」

「谷崎潤一郎の短編小説で英題を“The Thief”という作品の、原題は何か。また、この英訳が収録されている図書と、日本語の原作が収録されている図書を、それぞれ示しなさい」

講義では、NDL-OPACやWebCATplusで書誌を調べたあとでOCLC WorldCATの米国内所蔵を確認すること、WebCATplusの所蔵館プロフィールでOCLC経由のILLに対応しているかどうかを確認すること等、詳細かつ実践的な指導が行なわれている。この授業を受講した学生は、実際にILL依頼や購入依頼を出す際にも、書誌情報や所蔵情報を正確に示すことができるようになるという。学生たちにインタビューする機会を得たが、CiNiiでは本文リンクがあってもアクセス可能かどうかがわかりにくい、WebCATplusでは目次情報が確認できる反面ヒット数が多すぎる、日本語文献の検索はOCLC WorldCATよりもWebCATやNDL、早稲田等のOPACのほうがよい、等の意見を聞くことができた。実際に使いこなしているからこそ、このように具体的なリクエストも出るのだらうと思われる。

4. 日米間に違いはあるか

以上、ハーバード大学およびUMass Amherstの図書館における情報リテラシー教育活動のいくつかを紹介した。これ以外にも、滞米中いくつかの大学図書館で実践例を見聞した。それらを含め、大学図書館における情報リテラシー教育活動について、日米間でどのような違いがあるか、学すべき点はどこにあるかについて、考えたい。

4.1 課題・困難に違いはない

総じて言えるのは、日本の大学図書館が抱えている課題や困難は、アメリカの大学図書館でも同様に抱えている、ということである。「どうすればもっと学生を呼び込むことができるか」「オリエンテーションや文献講座を全学レベルで必須化して効果的に行なえないか」「教員ともっと密に連携をとるべきだが」といった悩みは、日本と同様、アメリカのライブラリアンからも多く聞かれた。

成功例も少なくはない。シアトルのワシントン大学を訪れた際には、全学レベルで行なわれている情報リテラシー教育の取り組み⁷⁾についてお話をうかがった。また、UMass

AmherstのDomierさんが兼務するSmith Collegeの図書館でも同様の取り組み⁸⁾がなされているとのことであった。

が、未だ実現できていない大学も多い。ハーバード大学でも、複数のオリエンテーションやガイダンスが行なわれてはいるものの、学生数全体と比べると、実際の参加者はごく一部にすぎない。広報や参加者集めに苦心している様子もうかがえる。その他、講座を開講する、講義に参加する、教員の協力を得るといったことについても、必要性は感じているものの実現できていない、コスト、人員、協力連携等の面で大きな困難を感じている、という悩みの声を多数耳にした。実現できたところであっても、長年の検討の末、最近になってようやく実現した、あるいは、継続させるのに非常に苦労している、という話を聞いたことも少なくなかった。そういった意味では、少なくとも情報リテラシー教育活動という点において、日本の大学図書館だけが特に実施困難な事情を抱えるというわけではない。

4.2 web・デジタルメディアの活用姿勢は大きく異なる

次いで、特に注目すべき違いについていくつか指摘しておきたい。

1つは、webやデジタルメディアが有効に活用されている、という点である。その活動は、単にホームページ上にガイダンス資料やチュートリアルを置いておくというような、静的な手法にとどまらない。

先に紹介したLamont Libraryによるニュースリストは、新着情報や利用、検索についてのコラムを、blog、RSS、e-mail等の様々な形式で頻繁に発信している。また、オハイオ州立大学でお会いした東アジア分野専門のライブラリアンMaureen Donovanさんは、レファレンスサービスや情報リテラシー教育活動に、様々なwebサービスを利用している。Facebookによる利用者とのコミュニケーション作り、blogによる記事の発信、wikiを使った分野別資料ガイドの執筆等⁹⁾。

2007年6月にワシントンDCで開催されたALA年次大会では、「It's Showtime for Instruction Librarians」と題された分科会に参加した。これは情報リテラシー教材のための動画作成についての企画で、実際にwebに動画を公開している大学図書館等の作品やノウハウが紹介された¹⁰⁾。昨今では、公共、大学等の館種を問わず、動画を作成して自館webサイトやYouTube等にアップロードしている例¹¹⁾が非常に多い。また、同大会の他の分科会では、blogを利用者からのフィードバック受け付けとコミュニケーション作りのためのツールとして活用した例¹²⁾、セカンドライフ上で情報入手に苦慮している人に対して行なうライブラリアン活動の例等も紹介されていた。

一方で、日本の図書館ではblogの開設すら未だ少数派であるという現実がある。そのギャップは絶望的に大きい。こういったwebやデジタルメディアの活用については、これらの事例からその積極的な姿勢を学ぶべきであろう。

4.3 個人対個人のコミュニケーションの場となる

GSAS Orientation での例のように、オリエンテーションやガイダンスが、学生・研究者とライブラリアンとによるコミュニケーションまたは人間関係形成の場として機能している、というのも、日米間の違いの大きさを実感した点の1つである。

Freshman Open House や GSAS Orientation の開催に先立って学内のライブラリアンに届いた案内文では、新入生と交流を持ち、顔と名前を知ってもらい良い機会である、という触れ込みで参加が呼びかけられていた。また Open House の学生向けフライヤーにも、このイベントで得られる体験として「MEET OUR STAFF」というフレーズが強調されている。

事務的な情報の伝達や一方的な講義で終わる、という例も皆無ではないが、インタビュー等をまじえて参加者と十分にコミュニケーションをとり、プロフィールや研究テーマ、具体的なニーズを把握した上で、それに合わせて進行していく、という様子を見ることの方がむしろ多かった。ライブラリアンの側でも、自分の専門分野やプロフィールを自己紹介し、オフィスのある場所、レファレンスデスクに座っている曜日と時間等を相手に伝え、自分に何ができるかを明確にアピールする、ということが当然のように行なわれていた。学生・研究者とライブラリアンとが、何を必要としているか、何が提供できるかを互いに伝え合う。それによって、9～10月の限られた時期だけでなく、その後も継続して随時有益なアドバイスや情報提供ができる関係をお互いが自ら能動的に築いていく。オリエンテーションやガイダンスをそのような個人同士のコミュニケーションの場として活用する姿勢は、日本の大学図書館ではあまり見られないのではないだろうか。

そしてその背景には、ライブラリアンが一個人として働き、利用者に対して顔と名前を出して指導や発言ができる、という日米間最大の違いがある。

コミュニケーションのとり方、人間関係の築き方、ライブラリアン（図書館員）という職業のあり方等、日米間の社会、習慣、意識の違いは大きい。したがって、まったく同様の姿勢でのオリエンテーションやガイダンスを実施するのは困難であろうし、そのやり方を直輸入することが有効であるとも思えない。が、少なくとも、数多くあるアメリカの情報リテラシー教育活動の実践例から何かしらを学び取ろうとするにあたっては、こういった日米間の違いに

ついて十分に留意しておく必要があるのではないかな。

参 考 文 献

- 1) 研修全体についての経緯と主な内容については以下の論文で報告している。江上敏哲. 長期・滞在型海外研修の実践: ハーバード大学イェンチン図書館実地研修. 大学図書館研究. 2008, no.84, p.47-55.
- 2) 京都大学図書館機構. ハーバード日記: 司書が見たアメリカ. <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/wordpress/> [accessed 2009-04-06].
- 3) 以下、数値は下記を参照。The Office of Institutional Research. Harvard University fact book 2007-08. http://www.provost.harvard.edu/institutional_research/FACTBOOK_2007-08_FULL.pdf [accessed 2009-04-06].
- 4) Harvard College Library. Lamont Welcomes Freshmen with Annual Open House. http://hcl.harvard.edu/news/2007/lamont_open_house.html [accessed 2009-04-06].
- 5) Lamont Library. The Lamont News-List. <http://lamontnews-list.blogspot.com/> [accessed 2009-04-07].
- 6) 以下の文献等がある。
米澤誠. インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ: 大学図書館におけるネット世代の学習支援. カレントアウェアネス. 2006, no.289.
井上創造. UMASS Amherst 校図書館視察報告. 九州大学附属図書館研究開発室年報 2006/2007. 2007, p.43-49.
茂出木理子. ラーニング・コモンズの可能性: 魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ. 情報の科学と技術. 2008, vol.58, no.7, p.341-346.
江上敏哲. UMass Amherst のラーニングコモンズ. 大学の図書館. 2008, vol.27, no.8, p.164-165. 他
- 7) University of Washington Libraries. UWILL. <http://www.lib.washington.edu/uwill/> [accessed 2009-04-07].
- 8) Smith College Libraries. Information Literacy. <http://www.smith.edu/library/services/faculty/infolit/> [accessed 2009-04-07].
- 9) 以下をはじめ多数の web ページがある。The Ohio State University Libraries. Japanese Collections. <http://library.osu.edu/blogs/japanese> [accessed 2009-04-07].
- 10) Valdosta State University, Odum Library Media Center. Library Films. http://www.valdosta.edu/library/media/library_films.shtml [accessed 2009-04-07], Indiana University South Bend, Franklin D. Schurz Library. It's Showtime for Instruction Librarians!: The Making of Short Films for Marketing and Instruction. <http://www.iusb.edu/~libg/ala/2007/LI/> [accessed 2009-04-07], 等。
- 11) 最近の例では, From Haydn to Hip Hop: Music at the Carnegie Library of Pittsburgh. <http://www.youtube.com/watch?v=GrTN7B0tcMc> [accessed 2009-04-07], 等。
- 12) Meredith Farkas. Tales from Outside of Public Libraries. <http://www.slideshare.net/librarianmer/tales-from-outside-of-public-libraries> [accessed 2009-04-07].

Special feature: Information literacy. Information literacy education activities in American university libraries: case study of Harvard University libraries etc. Toshinori EGAMI (International Research Center for Japanese Studies, 3-2 Goryo-Oeyamacho, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192 JAPAN)

Abstract: The author spent one year at the Harvard-Yenching Library on an internship beginning in March 2007. He observed a number of orientations and instruction classes at Harvard University, University of Massachusetts Amherst, and other university libraries in the U.S. This article describes some cases of information literacy education activities and points out the differences and similarities between Japan and the U.S. Both American and Japanese university libraries encounter similar difficulties in their activities. Meanwhile, they utilize web technology and digital media, and build communication with users through their activities.

Keywords: information literacy education activities / Harvard University / University of Massachusetts Amherst